大学教育研究紀要　第７号（2011）　49－62

朱子の「太極」と「気」

孫　路易

“気（Qi）” and “太極（Taiji）” in the Zhu Xi Philosophy

Luyi SUN

要　旨

朱子の本体論には解明を要する幾つかの問題がなお存すると思われる。

朱子にあっては、根源的な存在、つまり本体は太極であり、太極は即ち理である。これは既に諸家によって指摘されているものであるが、しかし、理の原則を扱った説明には、理は造作しない、或いは造作できないという規定があるのに対して、太極についての論述にはこれと同様な規定はない。これはなぜか。それから、太極は本体で、理は即ち太極であるならば、理は気より先に存在するのは極めて明白な事柄であるが、にもかかわらず朱子の弟子達は「理気先後」について執拗に質問をし、それらの質問に対しての朱子の答えは一様ではない。これはなぜか。

朱子にあっては、恐らく、気が三種類の様態で存在していると考えられていたのであろう。即ち、太極としての気（理気未分の状態）、陰陽としての気（気或いは一気）、五行（質）としての気、という三つの存在様態である。朱子のいう気は、実際は陰陽二気を指すと思われる。太極は気ではあるが、その気はまだ理と分離していない。この状態にある太極としての気が形而下的な存在としての陰陽二気と混同されるのを恐れて朱子は、太極は気だと言うのを、なるべく避けようとしたのである。太極としての気は、占める空間的な場がないために、直ちに陰陽二気になってしまうものだから、無形から有形へと変化するという過程において言えば、太極が先に存在するが、実際の生成順序においては、時間的な先後はない。これが故に、朱子の答えはいつも瞭然としないのである。

キーワード：一気、質、造作、理気先後、理気未分

一

朱子（一一三〇―一二〇〇）の本体論を構成する基本概念は、太極と理と気である。それらの概念は、その学問体系の根底に据える基盤、或いはその学問体系を支える脊柱とでも言えるもので、これまではこれらの概念について幾多の議論を重ねてきた。だが、それらの議論を仔細に検討してみると、朱子の本体論や生成論において、太極と理または気との関係について解明を要する幾つかの問題がなお潜在していると思われる。

例えば、朱子の本体論では、本体は太極であり、太極は理であって気の上位概念であるというのがこれまでの定論である。しかし、この論には問題がある。太極は理であり気の上位概念であるならば、理は気より先に存在するのは極めて明瞭な事柄であるが、にもかかわらず朱子の弟子

たちは執拗にどちらが先かと朱子に質問し、しかも朱子のその問いに対する答えは一定ではない[1]。これはなぜか。『朱子語類』[2]や『晦庵先生朱文公文集』[3]などを丹念に読んで行く過程において、自ずとかかる疑問の湧出を禁じ得ない。

本稿では、この問題を提起して、『語類』や『文集』などを基本資料として朱子の本体論について仔細に考察し、その本体論の肯綮を探索したい。

二

朱子は、四十一歳の時に周惇頤の『太極図説』に対して『太極図説解』の初稿を書き（定稿は四十四歳の時）[4]、五十七歳から六十歳までの間に『太極図説』にいう「無極にして太極」の句をめぐって陸兄弟、即ち陸九齢（字は子寿、一一三二―一一八〇）、陸九淵（字は子静、一一三九―一一九二）と論争を繰り返していた[5]。『太極図説解』及び陸兄弟に宛てた書簡を見れば、朱子の本体論は、終始一貫して太極を本体としていることが明白である。『語録』には、

「太極はただ天地万物の理に過ぎない」、「太極はただ一つの理の字だ」、「太極はただ一つの理だ」[6]

などとあるように、太極は即ち理、と思わせる叙述が多く記録されていて、朱子にあっては太極と理は同一の概念であるということが、既に諸家によって指摘されている。「太極はただ一つの理だ」という甚だ明晰な言い方を取っている以上、太極と理は同一の概念だと判断するのは、極めて妥当と思わざるを得ない。太極は即ち理であるということは、間違いないが、ただ、理の原則を扱った説明と、太極についての論述とを比較してみると、理と太極の、その規定された原則において異なる部分が存在し、そこで困惑させられるのである。

太極については、『語類』には次のような記録がある。

「太極は空間的な体積がなく、形体もなく、占めるべき空間的な場もない」、「太極は一つの物ではなく、占める空間的な場もなく、無形の至りである。だから周惇頤は『無極にして太極』と言ったのだ」[7]

ここに、太極の幾つかの原則が述べられているが、陸九淵に宛てた書簡には、これより更に具体的な説明が記されている。

周子の、之を無極と謂ふ所以は、正に、其の方所無く、形状無く、以て無物の前に在りて、未だ嘗て有物の後に立たずんばあらずと為し、以て陰陽の外に在りて、未だ嘗て陰陽の中に行はれずんばあらずと為し、以て全体を通貫して、在らざる無しと為せば、則ち又た初めより声・臭・影・響の言ふ可きもの無きを以てなり。今乃ち深く無極の然らざるを詆るは、則ち是れ直ちに太極を以て形状有り、方所有りと為すなり。直ちに陰陽を以て形而上なる者と為すは、則ち又た道器の分に昧し。…。熹の前書に「無極を言はざれば、則ち太極は一物に同じくして、万化の根本為るに足らず。太極を言はざれば、則ち無極は空寂に淪みて、万化の根本為る能はず」と謂ふ所に至つては、乃ち是れ周子の意を推本す。[8]

これらの説明を合わせて見れば、太極の原則が知られる。太極は、形而上的なものであり、あらゆる生成や変化（万化）をもたらす最も根源的なものであるが、声もなく臭いもなく、影もなく響きもなく、形状や形体を持たず、占めるべき空間的な場もない存在である。

一方、理について『語類』には、

「理は形体を有しない」、「気ならば凝結して造作することができるが、理は意情がなく、計度もなく、造作もない。ただ気が凝集するところに理が内在する。自然界における人や物や植物や動

物のようなものは、その生ずるに種がなければならず、種がなくて何もないのに物が生ずることは、考えられないのであり、これはすべて気である。もし理ならば、ただ一つ形のないがらんとした世界であり、形迹がなく、造作することもできない。気ならば醸し凝集して物を作り出すことができる」、「形而上なるものは、形がなく影もないこの理である」[9]
などと見える。理は、形而上的なものであり、形体を持たず、形もなく影もなく迹もなく、また造作もしない存在と規定されている。

太極と理のその規定される原則は、殆ど一致しているように見えるが、ただ一つ、理の造作しない或いは造作できないという原則が、太極にはないものである。つまり、朱子は、理は「無造作」或いは「不會造作」とは言うが、太極は「無造作」或いは「不會造作」とは一回も言っていない、という違いである。太極と理は同一の概念だから、理が造作しないものであるならば、太極も当然造作しないものであり、強いて太極も「無造作」或いは「不會造作」と明言していなくても、特に問題とするほどのものではないであろうと思われるかもしれないが、しかしながら、仔細に調査し検討してみると、太極は造作しない、或いは造作できないものとは言えない材料が、幾つか存するのである。

『語類』には、次の会話が記録されている。

安卿が「先天図には自然の象数があるが、伏羲は当初からそれを知っていたのですか」と尋ねて、(これに対して朱子は)「どうだか分からない。ただ円圏の図はわずかの造作の形迹があり、もし方形の図ならばただ現存のものによって書いただけである(陳淳の記録は「較自然」である)。円圏の図ならば真ん中を曲げて半分に折って(陳淳の記録は「圓図作両段来拗曲」である)、このように回って来るのが奇であり、このように回って行くのが偶であり、多少当初の書いたものにはよらないところがある。しかし伏羲も当初、ただ太極の下に陰陽があるのを見て、そこで一は二を生じ、二はまた四を生じ、四はまた八を生じるということを知り、このように推していって、先天図を作り上げたのだ」と答えた。[10]
ここにいう「先天図」は、恐らく邵雍の「先天卦位図」であろう[11]。ただ、文中の「円圏の図はわずかの造作の形迹があり」の「造作」が難解である。

「一は二を生じ、二はまた四を生じ、四はまた八を生ず」の「生」は、万物生成論として見る場合、「一」は太極であり、「二」は陰陽であり、「四」は、四象であるが即ち五行にも当たるものだから[12]、陰陽二気が凝集して五行を生ずることを意味する「二はまた四を生じ」の「生」は即ち、「造作」であろう。「一は二を生じ、二はまた四を生じ」の二つの「生」の字が同義ならば、太極も「造作」することになりはしないか。

しかし、確かに木下鉄矢氏が指摘した通り、「両義は四象を生じ、四象は八卦を生ず」の「生」は、「先天図」を書く際の「2×」という「演算」だという一側面を持っている[13]。この方向から上文の「造作」を理解するならば、伏羲が既存の円圏の図を少し改変して「先天図」を作った、という意味の「造作」と解することも可能である。つまり、その「造作」という動詞の主語は太極ではなく、伏羲である。

上文の「造作」という動詞の主語は恐らく伏羲であろう。だが、これは、朱子にあっては、『易』の「一は二を生じ、二はまた四を生じ、四はまた八を生ず」の「生」に対して万物生成論的な解釈を全くなされていない、ということを意味しない。『語類』に

『易』の精微は、その「両義は四象を生じ、四象は八卦を生ず」にある。八卦は六十四卦を生じて、「万物万化」(あらゆる物やあらゆる造化)は皆ここから出てくるものである。最も肝要なのは復卦と姤卦で、復は陽気が動き出すその最初の所である。[14]

とあり、これを、朱子の『太極図説解』の冒頭の「無極にして太極」に対しての「造化の枢紐、品彙の根柢」（後述を参照）という解説と合わせて考えれば、「万物万化」や「陽気」や「造化」や「品彙」は、生成論的な意味合いを持つ語であって、その叙述は生成論的な解説だと見るのが自然であろう。

朱子において「一は二を生じ、二はまた四を生じ、四はまた八を生ず」の「生」は、万物の生成を意味する一側面をも持っているとするならば、その生成論では、陰陽二気が造作することを「生」としていること、また「一は二を生じ、二はまた四を生ず」の二つの「生」について両者は意味が異なるという説明もないことからして、太極も「造作」すると認めざるを得なくなるという事態が起きる。

朱子は、「太極はただ一つの理だ」といい、一方では理は造作しないものだと明言しながら、また太極は造作するものだと暗示している。両者の間に明確な齟齬が見られる。これは、思考の不安定によるものなのか、それとももとより太極の多様性に起因する説明し難さによるものなのか。この間の事情は、依然として明瞭ではない。故に朱子においては、太極と理は同一の概念ではないと断じてよいものか否か、疑問が残る。「気ならば醸し凝集して物を作り出す」ということを「造作」とするならば、造作の主体とする太極も、まずは気でなければならぬ。更に具体的に如何にして造作するのかという問題も生ずる。では、そもそも太極は、果たして気であり得るのか。更に考察を進めていきたい。

三

周惇頤の『太極図説』にいう太極は、恐らく気であろうと考えられているが[15]、朱子の『太極図説解』では、太極について、

「動にして陽、静にして陰たる所以の本体なり。然るに以て陰陽を離るる有るに非ず、陰陽に即して其の本体を指し、陰陽に雑はらずして言を為すのみ」、「蓋し太極とは、本然の妙なり、動静とは、乗ずる所の機なり。太極は、形而上の道なり、陰陽は、形而下の器なり。」[16]

と解説している。太極は本体であり、形而上的な存在として陰陽の上位概念とされていることは、確かであるが、気であるか否かは、ここでは判断できない。すると、陰陽二気の上位概念に一気という概念が朱子において存在するか否かが問題になる。

朱子は、万物の生成や変化、または鬼神や祭祀などを論ずる際によく一気という語を使っていた。しかし、その内容を見ると、その一気は陰陽の上位概念ではなく、陰陽そのものを指す場合が多い。万物の生成変化については、次のように言う。

「天地は一気に過ぎず、それが自ら陰陽に分かれて、その陰陽二気が互いに感ずることによって、変化して万物を生成したのであり、故に事物は常に対となっている。天は地と対をなし、生は死と対をなし、語りと黙り、動と静は皆それである。それはその種がこうだからである」、「陰陽は、一気で言えば、ただの一物である。もし二つの物と見るならば、日と月のように、男と女のように、また二つの事物でもある」[17]。

陰陽が、一気の二分したものではあるが、陰陽と一気は、同質の物とされている。鬼神や祭祀については、

「天地の間は、ただこの一気だけだ。来るものは神で、行くものは鬼である。人間の身体を譬えて言うならば、生きるのは神で、死ぬのは鬼であり、どれも一気に過ぎない」、「二気で言うならば、鬼は陰の霊で、神は陽の霊である。一気で言うならば、来るもの伸びるものは神で、行く

もの帰るものは鬼である。一気は、即ち陰陽が運動する気であり、来ると皆来るが、去ると皆去るということである」、「祭祀をつかさどる者は、既にそれの一気の流れ伝えるものならば、その誠敬を尽くして感格する時は、この気が、もとよりここに宿っているのだ」[18]
などとあり、鬼神は、陰陽ともいうが、実は気の往来を指し、一気の流動にほかならないのである。結局は、

「しかし二気の分かれは、実に一気の運動である」、「陰陽は一気に過ぎず、陽の消え去ることは、すなわち陰の現れである。陽が消え去ってから、また別に陰が現れることではない」[19]
というように、朱子のいう一気は実際、陰陽二気そのものであり、陰陽の上位に位置する概念ではない。

故に、先学には、「一気と二気の間に、時間的生成論的意味に於ても、論理的形而上学的意味に於ても、次元の相違が認められていない」、「一気と二気とが原理的に対立する二つの存在ではなく同一の存在を相異なる立場から認識する結果生ずる二つの名に過ぎぬ」という見解がある[20]。この見解は至当のものだと思われるが、しかし、一気と陰陽が同一の存在であるということは、一気は陰陽の上位概念ではないことを意味するに過ぎないと考えれば、これを根拠にして陰陽の上位概念に気が存在しない、または太極は気ではないとまでは、まだ断定できないかもしれぬ。

実際、先行研究では、陰陽の上位概念に気が存在するということが、既に立証されているのである[21]。その論証過程は、次の如くである。「朱子の本体概念が気一元的形態と太極一元的形態との二つの表現形態を取って居る」[22]というのが、その結論であるが、しかし、この「二形態は互に矛盾相容れざるものではあるまいか」という疑問も、同時に生じたのである。両形態の併存しうる原因を求めるために、論者は、以下のような七つの可能性を想定して厳密な検討を行っている。

一、陰陽五行万物は、一気を本とするものと、太極を本とするものとの両部に分れると考えたためではなかろうか。

二、一気は天地開闢以後のもの、太極は天地開闢以前のものとなしたためではなかろうか。

三、一気は即ち陰陽二気のことで、太極一元論とは矛盾しないものではなかろうか。

四、河図洛書の本体生成思想が、気一元なるものであるが、朱子は、周易・周子とともに太極一元を信じたのではあるまいか。

五、両表現形態のどれか一つは、朱子自身の思想ではなく、後人の竄入にかかるものではあるまいか。

六、そのどれか一方は、早年未定の論で、竟に改定するに及ばなかったものではあるまいか。

七、朱子が、両者の矛盾に気付かずして二者を並べて説いたのではあるまいか。

この七つの可能性を想定して検討した結果、最後に「此の両形態が共に朱子晩年のものであり、此の両形態を併説することが反って彼の真意であったというようなことが明らかになって来たのである」[23]と、その結論を再確認したのである。

朱子の本体論についての論考においては、これより詳細なものは存在しないであろう。太極と同レベルにして陰陽二気の上位概念としての気が存在すると証明したことは、不朽の功績と言える。

だが、太極と陰陽の上位概念としての気が絶対同一物ではないとまでは、依然として断定することができない。『語類』には、

「渾淪としてまだ判れていない状態においては、陰陽の気が、混合していて幽暗であった。そ

の既に分離するに及んで、中央が開いて広々として光り輝いて明るく、そこで両儀が始めて成立したのである」[24]

とある。「両儀」が成立する前には、「渾淪としてまだ判れていない状態」が存在するとされている。この「渾淪未判」の状態を、分離する前の一気の混沌とした状態だとも考えられるが、しかし、この文を、

「輔廣が、そこで『太極は一旦判れれば、すなわち陰と陽の相対が現れるのです』と言うと、(先生は)『その通りだ』とおっしゃった」[25]

という対話と合わせ考えれば、「渾淪未判」の状態が、即ち太極だと明確に理解し得るであろう。もう一例を挙げるならば、太極図を通して太極と太虚に触れた発言にそれを見ることもできる。『語類』に

「『太虚はすなわち太極図の上位の円圏であり、気化はすなわち円圏の中の陰陽の動きですか』と尋ねた。(先生は)『そうだ』とおっしゃった」、「太極図の『無極にして太極』は、上位の一円圏は、即ち太極である」[26]

とある。これらの記録に示された朱子の意を忖度すると次のようになろう。この太虚は、即ち張載の『正蒙』にいう太虚であり[27]、張載のいう太虚ならば、それが気であることは、周知の事柄であって疑う余地がない。「太極図」の上位に位置する円圏を、太極または太虚とする、つまり太極と太虚を同一視する傾向を示した朱子の胸中には、太極は気だという意が欠片もない、とはやはり考えにくい。

朱子は、よく弟子達に理と気はどれが先に存在するのかと質問されていた。これは、所謂「理気先後」の問題である。「理気先後」は、朱子が生存していた当時に、既に関心事の一つになっていた。しかし、弟子達に頻繁に問われていたその「理気先後」についての朱子の答えを見ると、それが、実に判然としないものである。もし太極が、気の上位概念と規定されているならば、太極と同義の理も、当然気の上位概念であり、理は気より先に存在するのは自明のことであって、問題になる理由はないはずである。それにもかかわらず、「理気先後」が弟子達によって執拗に問われるのは、なぜなのだろうか。朱子の本体論の関鑰が、ここにあるかも分からぬ。

四

『語類』に記録されている「理気先後」についての朱子の答えを整理すれば、それを三種類に分けることができる。一つ目は、

「『先に理がありますか、それとも先に気がありますか』と尋ねた。先生は『理は気を離れることはない。しかし理は形而上なるものであり、気は形而下なるものである。形而上・下から言えば、どうして先後がなかろうか。理は形がないが、気ならば粗いので、渣滓がある』」、「尋ねた、『この理があればこの気がありますので、先後を分けることができないようですが。』先生はおっしゃった、『要は、やはり先に理がある。』」[28]

などの示すように、理が先だ、とはっきり答えたものである。二つ目は、

「或る人が、先に理があり後に気があるという説について質問した。先生は答えた、『そのような言い方はよくない。いまは、それはもとより先に理があって、後に気があるのか、後に理があり、先に気があるのか、どれも突き止めることはできない、と思う。』」[29]

とある如く、理と気、どれが先でどれが後かは知らない、と答えたものである。それから、

「或る人が、理は先にあって、気は後にある、について尋ねた。先生はおっしゃった、『理と気

は、本来は先後を言うことができないのであるが、しかし推究していくと、やはり理が先にあって、気が後にあるかのように思う。』」、「或る人が尋ねた、『必ず理があって、それから気がある、いかがですか。』先生は言われた、『これは本来、先後を言えないものであるが、どうしてもその本を突き止めようとしたいならば、理が先にあると言わざるを得ない。』」[30]

などとも見える。これが三つ目で、理と気は、本来どれが先でどれが後だと言うべきものではないと断っておきながら、理のほうが先だとする答えである。此くの如く、朱子の答えは一定したものでないが故に、その主意を捉え難いことは、明らかであり、当時の朱子の弟子達も釈然としなかったことは、容易に想像し得る[31]。

前述したように、朱子は四十一歳の時に『太極図説解』を書き、四十四歳の時に稿を定めた。実際、『太極図説解』を書く時に、「理気先後」の問題が、既に存在していたに違いない。陰陽二気が交わることが万物の生成変化を生じたとするならば、陰陽二気が万物の根源になるが、しかし『太極図説解』の冒頭の「無極にして太極」に対しての解説は、

上天の載は、無声無臭にして、実に造化の枢紐、品彙の根柢なり、故に曰く、『無極にして太極』と。太極の外に、復た無極有るに非らざるなり。[32]

であり、無極太極を、「造化の枢紐、品彙の根柢」としている。これは、前引の陸九淵に宛てた書簡にいう「万化の根本」としての無極太極とも同義である。自然界の生成過程を辿っていくと、最終的には、無極太極にまで遡源する。すると、太極は如何にして陰陽二気を生じたのかが常に問題になっていたはずであろう。

自然界は、山や川や植物や動物などで構成されるが、

「気が集って質となる」、「陰陽は気であり、この五行の質を生ずる。天地が物を作り出す時、五行が最初に作られるのである。地は即ち土であり、土には多くの金木の類を包含している。天地の間には、五行でないものはない。五行と陰陽、この七者が混合すれば、すなわち物を作り出す材料である」[33]

などというように、山や川や植物や動物などは、皆「金木水火土」という五行で構成されている。五行は、陰陽二気が凝結してできた質であり、これが即ち万物を作る材料である。陰陽は気で、五行は質であり、「気ならばすなわち金木水火である」とは言うものの、基本的には、「気は自ずと気であり、質は自ずと質である。混同して言ってはいけない」[34]と朱子は峻別している。五行は、陰陽から生じたものであるが、陰陽は、もし「理があって後に気を生じた」[35]という言葉の通りであるならば、理より生じたものになる。しかし、陰陽と理の関係について「理が陰陽に搭っかって、ちょうど人が馬に跨っているのとよく似ている」[36]と朱子は説明している。つまり、陰陽と理は全くの別物である。かかる意味からするならば、陰陽は凝結して質となるものだから、それを質料的な存在として扱われていることは明瞭であり、これに対して言えば、理は形相的な存在であると認められる。もし太極は単なる理ならば、形相的な存在は質料的な存在を生ずることができるとは考えられないから、それは、陰陽に付着しているだけで、陰陽二気を生ずることなどはしないはずであろう。すると、太極を「造化の枢紐、品彙の根柢」「万化の根本」とする所以は、見出せない。この点の解明がない限り、太極についての正しい認識に到達することはあるまい。

理は「造作しない」ものだから、質料としての陰陽はやはり理より生じたものではない。「理があって後に気を生じた」とは、

「『動静は気ですが、この理があって気の主となっているから、気がこのようにすることができたのですかそうではないですか』と尋ねると、先生は『その通りだ。既に理があれば、すなわち

気がある』とおっしゃった」[37]

という記録が示したように、恐らくは気そのもの、つまりその質料としての部分を生じたのではなく、気の動静、つまりその形相としての運動様式を生じたことを指すであろう。そうだとするならば、陰陽は即ち、動静という運動をする気を意味する。陰陽は即ち動静の気、ということは、極めて一般的な常識であって、特に検討する必要のない事柄であるが、問題は、理論上では陰陽の上位概念としての気、つまり動静の運動をしない気が存在しなければ、気の動静の由来については説明がつかないのである。

実際、「暫くして、そこでやっとおっしゃった、『「無極にして太極」は、一つの物が光り輝いてそこに存在することを言うのではなく、ただここに最初は一物もなく、理が存在することだけを言うに過ぎない。既に理があれば、すなわち気があり、既に気があれば、すなわち陰陽に分かれて、そこで沢山の事物を生じたのだ」[38] と朱子が述べており、朱子の脳裏では、理と陰陽の間に気が実在することが明確に意識されていた、と推察し得る。理と陰陽の間に位置するこの気を、動静の運動をしない気だとするならば、陰陽の上位概念としての気が実在することが認められる。だが、ここにもう一つ問題が生ずる。つまり、もし太極が理でしかなければ、「既に理があれば、すなわち気があり、既に気があれば、すなわち陰陽に分かれて」は、「一（理）は一（気）を生じ、一（気）は二（陰陽）を生ず」という生成順序を、示していることになる。この生成順序は、『老子』にいう「道は一を生じ、一は二を生ず」と一致するもので、『易』にいう「易に太極有り、是れ両儀を生ず」とは異なるものである。では、朱子は、道教の生成論に対してどういう見方を持っていたのか。『語類』には次のような記録がある。

老氏の「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生ず 」も、また一つの道を余計に言ったものである。すなわち太極は陽を生じ、陽は陰を生じて、二は三を生ずる、になるようなもので、言うまでもなくどれも無理である。[39]

この文が示すように、老子の説に鋭い批評を与えている。そこで、もし道教生成論に対して批判的な態度を取る朱子が、「易に太極有り、是れ両儀を生ず」という儒教生成論に当然の如く従うとするならば、必然的に太極は気でなければならない、という結論まで行き着くであろう。

太極と陰陽の違いは、太極は形而上なるものであるに対して、陰陽は形而下なるものであり、また太極は動静という運動をしないのに対して、陰陽は動静という運動をする、というこの二点にある。形而上なるものは、形質を持たないのに対して、形而下なるものは、形質を有するが、しかし、

形而上、形而下は、ただ形（の有無）で離合し分別するならば、これは正に（両者の）最もはっきりした境界線であるに違いないが、もし（図に描かれたように）上にあるものと、下にあるものとを言うに止まれば、両者が断絶したものになる。[40]

と朱子は注意を促す。両者は、無形と有形の違いがあるものの、非連続的なものではない。実際、太極と陰陽は、「太極の動はすなわち陽で、静はすなわち陰である」という関係であり、これが故に、「今の人は、陰陽の上に別に一つの形もなく影もない物があり、これが太極だと言うが、間違っている」[41] と朱子は戒めたのである。太極と陰陽は、無形から有形へと変化する過程では先後の順序があるが、同一物、つまり同一の質料としての気である、という点において言えば、先後の順序はないはずである。

これまでの考察の内容を総括して結論を下すならば、朱子のいう太極は気理の未分状態だ、と断じてほぼ問題がないことが、自ずと理解されるであろう。では、太極には気の要素があるにもかかわらず、朱子はなぜそれを明言することを、極力に拒んだのか。その原因は、気は物質性が

強い概念だという所にある、と考えられる。

「陰陽は気でありながら、どうして形而下なるものだと言うのですか」と尋ねると、先生は「既に気と言うならば、すなわち一つの物があり、これで形而下なるものだと言うのだ」とおっしゃった。(42)

のように、朱子はもし太極は気だと明言すれば、太極は一つの物だと人々が誤解してしまうことを恐れていたのではないか、と推測できる。恐らく朱子は、気が三種類の存在様態で存在していることをはっきりと意識していたのであろう。それはつまり、太極としての気、陰陽としての気、それから五行としての気という三つの存在様態である。この三つの存在様態において、気と言えば、即ち陰陽を指すにほかなるまい。

太極の場合は、現象界の背後にある、超経験的な、現象界を生み出す根源的な存在として、理論上その存在を認めなければならないが、「方所がなく」、つまり占めるべき空間的な場がないものだから、直ちに陰陽にならざるをえない。つまり、太極と陰陽、この両者の生成順序には実際、時間的な先後がないのである。この点は、「『太極は動にして陽を生じ、静にして陰を生ず』とあるので、理が先で気が後だと見えますね」という質問に対しての、「そのようであるが、しかしこのように理解してはいけない。両者はあれば皆あるのだ」(43)という朱子の答えでも確認できる。これに関連して、ここで、王陽明のいう「太極の生生は、即ち陰陽の生生」という言葉を思い出させる(44)。ここに至って、ようやく、朱子が、なぜ、「理気先後」についてはあのような、一定しない説明をしていたのかは、理解されるであろう。

五

朱子の本体論においては、その本体としての太極は即ち理である、というのが極めて明白に述べられたものだが、理の原則には「造化しない」という規定があるのに対して、太極の原則にはこれと同様な規定はない。これはなぜなのか、というのが最初の疑問であった。

周敦頤『太極図説』の生成論と『易』の「易に太極有り。是れ両儀を生ず。両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず」を合わせて、朱子の生成論が成立する。だが、朱子は、「太極は陰陽を生じ、陰陽は四象を生ずる」の二つの「生」について何の区別も述べていないし（生成論では四象が五行とされる）、しかも「太極図」の上位の円圏を張載のいう太虚ともしていた。すると、必然的に太極は気でありながら、造作もする、という事態になりはしないか、というのが次の疑問である。

朱子の弟子達は、よく朱子に「理気先後」について質問していた。しかし、朱子の答えが一定ではないが故に、理と気、どちらが先に存在するのかが判然とせず、弟子達も腑に落ちなかったのであろう。太極は本体であり、理と同一の概念であれば、気より先に存在するのは極めて明白である。では、なぜ弟子達は執拗に質問をし、そして朱子は截然と分かるような答えを出せなかったのか。これが三つ目の疑問である。

これらの問題を解く鍵は、陰陽の上位概念に気概念が存在するか否かを究明することにあり、太極と同レベルの気の有無はまた、朱子の本体論の枢要ともなっていた。朱子にあっては、恐らく、気が三種類の存在様態で存在していると考えられていたのであろう。即ち、太極としての気、陰陽としての気、五行（質）としての気、という三つの存在様態である。朱子のいう気は、実際は陰陽二気を指すと思われる。形而上的な存在である太極も気ではあるが、それが形而下的な存在としての陰陽二気と混同されるのを恐れて朱子は、太極は気だと言うのを、なるべく避けよう

とした。また、太極は気ではあるが、占める空間的な場がなく、直ちに陰陽二気になってしまうものだから、無形から有形へと変化するという過程において言えば、太極が先に存在するが、実際の生成順序においては、時間的な先後はない。これが故に、朱子の答えはいつも瞭然とせず、その理論に扞格するところが少なくない、と感じられたのである。

一般的に言えば、中国思想では、その本体論において常に気概念が存在するのであり、これを通念としていた朱子の弟子達にとって朱子の本体論における気概念の存否は、不断の関心事であった。これが、弟子達が執拗に質問していた所以であろう。「理気先後」についての質問に答えたものではないが、『語類』にはたった一箇所だけ「太極はただ一つの気に過ぎず」(45) という朱子の言が記録されている。

太極は理である、これは、朱子の本旨には間違いないが、もし「太極はただ一つの気に過ぎず」という規定も朱子の真意であるならば、太極は、単なる理でもなく単なる気でもない、理と気がまだ分離していない状態である、ということが推察されよう。

注

（1）朱子哲学研究において、「理気先後」の問題は重要な研究テーマであって、これまではこの問題をめぐって研究者の間では多くの議論を重ねてきたのである。それらの研究成果において陳来氏の論述が最も詳細であろうが、氏の論には腑に落ちない点がなお存すると思われる。これについては本稿の注（31）を参照。

（2）宋・黎靖徳編『朱子語類』（全八冊、王星賢點校。中華書局、一九九四年。以降『語類』と略称する）。

（3）『晦庵先生朱文公文集』（以下は『文集』と略称する）。本稿では『朱子全書』（全二七冊、朱傑人、厳佐之、劉永翔主編、上海古籍出版社、安徽教育出版、二〇〇二年。以下は『全書』と略称する）所収の『文集』を用いる。

（4）陳来『朱子哲学研究』（華東師範大学出版社、二〇〇〇年）七五～九九頁を参照。

（5）朱子と陸兄弟との論争については、山下龍二『朱子学と反朱子学』（研文社、一九九一年）の第二章「宋学」の第二節「朱子と陸象山」の一「朱陸の太極論争」と二「論争の焦点」及び三「論争の本質」、などを参照。

（6）「太極只是天地万物之理」（『語類』巻一、陳淳録、一頁）、「太極只是一箇理字」（『語類』巻一、万人傑録、二頁）、「太極只是箇理」（『語類』巻九四、葉賀孫録、二三七〇頁）

（7）「太極無方所、無形體、無地位可頓放。」（『語類』巻九四、黄榦録、二三六九頁）、「太極却不是一物、無方所頓放、是無形之極。故周子曰無極而太極。」（『語類』巻七五、黄榦録、一九三一頁）

（8）「答陸子静」（『文集』巻三六、『全書』第二十一冊）一五六八～九頁を参照。

（9）「理無形体」（『語類』巻一、陳淳録、一頁）、「蓋気則能凝結造作、理却無情意、無計度、無造作。只此気凝聚處、理便在其中。且如天地間人物草木禽獸、其生也、莫不有種、定不會無種子白地生出一箇物事、這箇都是気。若理、則只是箇淨潔空闊底世界、無形迹、他却不會造作。気則能醞釀凝聚生也。」（『語類』巻一、沈僩録、三頁）、「形而上者、無形無影是此理。」（『語類』巻九五、葉賀孫録、二四二一頁）

(10)「安卿問、先天図有自然之象数、伏羲当初亦知其然否。曰、也不見得如何。但圓図是有些子造作模様、如方図只是據見在底畫。（淳録云、「較自然」）圓図便是就這中間拗做兩截、（淳録云、「圓図作両段来拗曲」）恁地轉來底是奇、恁地轉去底是耦、便有些不甚依他當初畫底。

然伏羲当初、也只見太極下面有陰陽、便知是一生二、二又生四、四又生八、恁地推将去、做成這物事。」(『語類』巻六六、黄義剛録、一六二四頁)

(11)「先天図」としては、「太極先天之図」(『上方大洞真元妙経図』道藏第一一冊、図十三)というものがある。しかし、吾妻重二『朱子学の新研究』(創文社、二〇〇四年)第一章「太極圖の形成」や楊柱才『周敦頤哲学思想研究』(人民出版社、二〇〇四年)第三章や第五章、などの論考によると、「太極先天之図」は南宋以降のもので、周敦頤の「太極図」を改変して作られたものである。伏羲の「先天図」は、

安卿問「先天圖説曰『陽在陰中、陽逆行、陰在陽中、陰逆行。陽在陽中、陰在陰中、皆順行。』何謂也。」曰「圖左一邊屬陽、右一邊屬陰。左自震一陽、離兌二陽、乾三陽、為陽在陽中、順行。右自巽一陰、坎艮二陰、坤三陰、為陰在陰中、順行。坤無陽、艮坎一陽、巽二陽、為陽在陰中、逆行。乾無陰、兌離一陰、震二陰、為陰在陽中、逆行。」又問「『先天圖、心法也。圖皆自中起、萬化萬事生乎心』何也。」曰「其中白處者太極也。三十二陰、三十二陽者、兩儀也。十六陰、十六陽者、四象也。八陰、八陽、八卦也。」(『語類』巻六五、黄義剛録、一六一五～六頁)

によれば、即ち「先天卦位図」と思われる(朱熹『周易本義』に所収の「易図」の中の「伏羲八卦方位」を参照)。

(12)「問、通書解論周子止於四象、以為水火金木、如何。曰、周子只推到五行」(『語類』巻九四、鄭可学録、二四〇〇頁)、「安卿問、明通公溥、於四象曷配。曰、明者明於己、水也、正之義也。通則行無窒礙、木也、元之義也。公者、公於己、火也、亨之義也。溥則物各得其平之意、金也、利之義也。」(『語類』巻九四、劉砥録、二四〇七頁)とある。

(13) 木下鉄矢『朱熹再読　―朱子学理解への一序説―』(前掲)二六七頁を参照。

(14)「易之精微、在那『両義生四象、四象生八卦』、八卦生六十四卦、萬物萬化皆従這裏流出。緊要處在那復・姤邊、復是陽気発動之初。」(『語類』巻六五、李閎祖録、一六一七頁)

(15) 島田虔次『朱子学と陽明学』(岩波新書、一九六七年)八八～八九頁を参照。

(16)『太極図』の「図解」と「太極図説解」(『朱子全書』前掲、第十三冊)七〇頁と七二頁を参照。

(17)「天地只是一気、便自分陰陽、縁有陰陽二気相感、化生万物、故事物未嘗無対。天便対地、生便対死、語黙動静皆然、以其種如此故也。」(『語類』巻五三、周明作録、一二八六頁)、「陰陽自一気言之、只是箇物。若作両箇物看、則如日月、如男女、又是両箇物事。」(『語類』巻六八、林学蒙録、一六八八頁)

(18)「天地之間、只是此一気耳。来者為神、往者為鬼。譬如一身、生者為神、死者為鬼、皆一気耳。」(『語類』巻六三、呉雉録、一五四七頁)、「以二気言、則鬼者、陰之霊也、神者、陽之霊也。以一気言、則至而伸者為神、反而歸者為鬼。一気即陰陽運行之気、至則皆至、去則皆去之謂也。」(『語類』巻六三、周謨録、一五四八頁)、「但主祭祀者既是他一気之流伝、則尽其誠敬感格之時、此気固寓此也。」(『語類』巻三、沈僩録、五〇頁)

(19)「然二気之分、実一気之運。」(『語類』巻六三、董銖録、一五四九頁)「陰陽只是一気、陽之退、便是陰之生。不是陽退了、又別有箇陰生」(『語類』巻六五、陳淳録、一六〇二頁)

(20) 安田二郎『中国近世思想研究』(筑摩書房、昭和五十一年)十一頁と十二頁を参照。

(21) 後藤俊瑞『朱子の本体論』(台北帝国大学文政学部、哲学科研究年報、第三輯。一九三六年)

(22) 後藤俊瑞『朱子の本体論』(前掲)一七頁を参照。

(23) 後藤俊瑞『朱子の本体論』(前掲)四六頁を参照。

(24)「方渾淪未判、陰陽之気、混合幽暗。及其既分、中間放得寛闊光朗、而両儀始立。」(『語録』巻九四、周謨録、二三六七頁)

(25)「廣因云、『太極一判、便有陰陽相対。』曰、『然』。」(『語類』巻六二、輔廣録、一四八二頁)

(26)「問、太虚便是太極図上面底圓圈、気化便是圓圈裏陰陽動否。曰、然。」(『語類』巻六十、沈僩録、一四三〇頁)、「太極図『無極而太極』、上一圈即是太極。」(『語類』巻九四、湯泳録、二三六五頁)

(27) 太虚は、中国思想では宇宙生成論の根幹概念として漢代以前から用いられていた語であり、この語に与えていた意味も一定したものではない。ここにいう太虚は、

問「由太虚」云云。曰「本只是一箇太虚、漸漸細分、説得密耳。且太虚便是這四者之総體、而不雑乎四者而言。『由気化、有道之名』、気化是那陰陽造化、寒暑晝夜、雨露霜雪、山川木石、金水火土、皆是只這箇、便是那太虚、只是便雑却気化説。雖雑気化、而實不離乎太虚、未説到人物各具當然之理處。」問「太虚便是太極圖上面底圓圈、気化便是圓圈裏陰靜陽動否。」曰「然。」又曰「『合虚與気、有性之名』、有這気、道理便隨在裏面、無此気、則道理無安頓處。」(『語類』巻六十、沈僩録、一四三〇頁)

という対話に出たものであり、張載『正蒙』太和篇第一には「由太虚、有天之名。由気化、有道之名。合虚與気、有性之名。合性與知覚、有心之名。」とあるから、この太虚は即ち、張載のいう太虚に間違いない。

(28)「問、先有理、抑先有気。曰、理未嘗離乎気。然理形而上者、気形而下者。自形而上下言、豈無先後。理無形、気便粗、有渣滓。」(『語類』巻一、陳淳録、三頁)、「問、有是理便有是気、似不可分先後。曰、要之、也先有理。」(『語類』巻一、胡泳録、四頁)

(29)「或問先有理後有気之説。曰、不消如此説。而今知得他合下是先有理、後有気邪、後有理、先有気邪。皆不可得而推究。」(『語類』巻一、沈僩録、三頁)

(30)「或問、理在先、気在後。曰、理與気本無先後之可言、但推上去時、却如理在先、気在後相似。」(『語類』巻一、曾祖道録、三頁)、「或問、必有是理、然後有是気、如何。曰、此本無先後之可言、然必欲推其所以来、則須説先有是理。」(『語類』巻一、万人傑録、三頁)

(31) 陳来氏は「理気先後」について仔細の考察を行った。その要旨は以下の通りである。

朱子が理気関係を本体論において論じたのは『太極義解』(『太極図解』と『太極図説解』の総称)が最初であり、『太極義解』では朱子が太極を理とし、陰陽を気としたことによって理気関係の問題が生じたのであるが、「太極は体で、陰陽は用である」という体用論であって先後の問題はまだ提起されていない。朱子五十一歳の時に程迥に宛てた手紙に太極陰陽先後の問題に触れたが、「理気は先後無し」を主張した。五十五歳の時に陳亮との論弁において「理先気後」思想が形成し始め、五十七歳の時に陸象山との「無極而太極」についての論争の中で太極を「形而上なる者」とし、陰陽を「形而下なる者」として両者を峻別したこと、また六十歳の時に書いた『大学或問』にある「必ず是の理有りて而る後是の気有り」という語が、「理先気後」思想の成立を明確に示した。六十歳から六十五歳前後までは「理先気後」思想が一層発展して「理は能く気を生ず」の思想が形成したが、万物の本源としては「理先気後」とし、物体の構成としては「理気は先後無し」とする。晩年の定論として六十八歳以後は、万物の本源においては「理気は先後無し」とし、論理的に順序をつけるならば「理先気後」とする(前掲陳来『朱子哲学研究』、七五—九九頁)。

「理気先後」問題についての考察では、陳来氏の考察より詳しいものはないであろう。ただ、氏の考察は、理は即ち太極で、気は即ち陰陽であって、太極と気は絶対的に別物だというこ

とを何の疑問もなく前提にして行われていたことが明瞭である。また、その晩年定論として「『理與気本無先後之可言、但推上去時、却如理在先、気在後相似』(『語類』巻一、曾祖道録、六十八歳)」と共に「『此本無先後之可言、然必欲推其所以来、則須説先有是理』(『語類』巻一、万人傑録)」をも挙げたが、『朱子語類』の「朱子語類姓氏」には万人傑録を「庚子以後所聞」つまり五十一歳以後のものとしている。このことについて氏は、「『語類』巻第一百七によれば、慶元三年(朱子六十八歳)の初め、朱熹は奉祠職を取り上げられ官位を剥奪され、蔡元定は編管(官吏の犯罪者)として道州に連行されることになって、朱子が蔡元定のために送別の宴を開いた時に万人傑は朱子のそばにいた。この年は即ち曾祖道が上の条を記録した年であり、従って万人傑の記録は曾祖道と共に聞いて記録したものでなくてもこの時期の思想であるべきだと推定できる」(前掲、九五頁)と説明しているが、この説明は単なる可能性があることを推測しただけのものであって、それを根拠にしてその万人傑録を朱子六十八歳の時のものと見るのがかなり不安を感じるであろう。その万人傑録はやはり「庚子以後所聞」に従って朱子五十一歳以後のものだと見るのが無難である。

(32)『太極図』の「太極図説解」(『全書』前掲、第十三冊)七二頁を参照。

(33)「気積為質」(『語類』巻一、游敬仲録、二頁)、「陰陽気也、生此五行之質。天地生物、五行独先。地即是土、土便是包含許多金木之類。天地之間、何事而非五行。五行陰陽、七者滚合、便是生物底材料。」(『語類』巻九四、周謨録、二三六七～八頁)

(34)「気則為金木水火」(『語類』巻一、万人傑録、三頁)、「気自是気、質自是質、不可滚説。」(『語類』巻九四、黄義剛録、二三七八頁)

(35)「有是理後生是気」(『語類』巻一、廖徳明録、二頁)

(36)「理搭在陰陽上、如人跨馬相似。」(『語類』巻九四、周謨録、二三七四頁)。また、「答劉叔文」には「所謂理與気此決是二物」とある(『文集』巻四六、『全書』第二二冊、二一四六頁)。

(37)「曰、動静是気、有此理為気之主、気便能如此否。曰、是也。既有理、便有気。」(『語類』巻九四、陳淳録、二三七三～四頁)

(38)「久之、乃曰、無極而太極、不是説有箇物事光輝輝地在那裏、只是説這裏当初皆無一物、只有此理而已。既有此理、便有此気、既有此気、便分陰陽、以此生許多物事。」(『語類』巻九四、黄儀剛録、二三八七頁)

(39)「老氏『道生一、一生二、二生三』、亦剰説了一箇道。便如太極生陽、陽生陰、至陰生三、又更都無道理。」(『語類』巻一百、葉賀孫録、二五四五頁)。因みに、「答程可久」にも「有是理即有是気、気則無不両者、故易曰太極生両儀。而老子乃謂道先生一而後一乃生二、則其察理亦不精矣。」とある(『文集』巻三七、『全書』第二一冊、一六四三頁)。

(40)「形而上、形而下、只就形處離合分別、此正是界至處、若止説在上在下、便成両截矣。」(『語類』巻九四、鄭可学録、二三六九頁)

(41)「太極之動便是陽、静便是陰。」(『語類』巻九四、程端蒙録、二三七三頁)、「而今人説陰陽上面別有一箇無形無影底物是太極、非也。」(『語類』巻九五、林夔孫録、二四三七頁)

(42)「問、陰陽気也、何以謂形而下者。曰、既曰気、便是有箇物事、此謂形而下者。」(『語類』巻九四、潘植録、二三九一頁)

(43)「問、『太極動而生陽、静而生陰』、見得理先而気後。曰、雖是如此、然亦不須如此理會。二者有則皆有。」(『語類』巻九四、廖徳明録、二三七二頁)。「太極動而生陽、静而生陰」という語は、周惇頤の『太極図説』にいう「太極動而生陽、動極而静、静而生陰、陰極復動。」によるものである。

(44)「蓋其意従『太極動而生陽、静而生陰』説来。太極生生之理、妙用無息、而常体不易。太極之生生、即陰陽之生生。」とある（『王陽明全集』全二冊、上海古籍出版社、一九九二年。六四頁）。王陽明の「陰陽動静」説の詳細は、拙書『中国思想認識における幾つかの問題』（朋友書店、二〇〇六年）の第二章「王陽明の「良知」」を参照。

(45)『語類』に「一片底便是分做両片底、両片底便是分做五片底、做這箇万物。四時、五行、只是従那太極中来。太極只是一箇気、迤邐分做両箇、気裏面動底是陽、静底是陰。又分做五気、又散為万物。」（『語類』巻三、潘植録、四一頁）とある。